国際研究論叢　18（1）：141～152，2004

話本小説「風月瑞仙亭」について

張　軼　欧*

A study about colloquial short story "Feng Yue Rui Xian Ting"

Zhang Yiou*

キーワード
俗文学　話本小説　白話小説　卓文君　司馬相如

はじめに

"話本小説"「風月瑞仙亭」は宋代司馬相如と卓文君についての物語である[1]。周知の要に、宋代では、都市の繁栄、商業、物流の発達により、中国歴史の中ではじめて市民階層[2]が台頭してきた。彼らの娯楽の一種としての"説話(講釈師による物語を語る)"が盛んになり、そして、"説話"の底本としての"話本小説"という新しい文学形式が世に出された。"話本小説"は、話し言葉で書いた小説であるため、小論では、"話本小説"のことを白話小説と呼ぶ。

卓文君と司馬相如の物語は、漢の時代からさまざまな文学形式を用いて受け継がれてきた。漢、魏晋南北朝、唐においては司馬相如と卓文君のロマンスを詠う詩が多い。晋の謝恵連、梁の王僧孺、庾肩吾，北周の庾信，唐の杜甫、銭起、孟郊、元稹、李賀、張祐、李商隠などみな二人の愛情の物語を詠う詩を残している[3]。

宋代までの司馬相如と卓文君の物語を収めた文学作品を概観すると、作品数も多く、個々の作品において些細な変化が認められるが、史実と殆ど同じであった。しかしながら、宋代の白話小説「風月瑞仙亭」では、人物像の設定から物語の展開に至るまで、すべて史実とは異なっており、従来にない新しい特徴が認められる。小論では、「風月瑞仙亭」と史実との比較を通して、変化の特徴を抽出し、そこに至る理由について論じたいと思う。

Ⅰ、史実としての卓文君と司馬相如の物語と人物像

話本小説における卓文君と司馬相如の物語、ならびに人物像の変化を考察するには、まず二人の物語の構造や二人の人物像の原形について考えなければならない。卓文君と司馬相如（前179～前117）の恋愛物語が記録されている文献の中で最も古いものは司馬遷（前145～前86）が著した『史記・司馬相如列伝第五十七』である。

『史記』の「司馬相如傳」の内容は次のようになっている。

(1)、司馬相如の生い立ちについての紹介、および上京後の官僚としての生活。

(2)、梁孝王没後、帰省した臨邛での卓文君との出逢い。

＊ちょう　いつおう：大阪国際大学人間科学部非常勤講師〈2004.6.28受理〉

(3)、同郷人の楊得意の推薦で、梁武帝に『子虚賦』を奏上した。その賦の全文の紹介。

(4)、司馬相如が郎に封せられたことと唐蒙の事件における巴、蜀の民への布告「巴蜀に諭す檄」の一件。

(5)、司馬相如が中郎将に任じられ、使者として邛、筰へ赴任し、卓王孫が彼を出迎えたこととその後に読んだ賦「蜀の父老を難ず」の紹介。

(6)、武帝の狩猟に陪したこと、武帝の軽挙を戒めた文章の全文、及び秦二世を弔った「二世を哀しむ賦」の紹介。

(7)、孝文帝の陵園の長官に任じられたことと「大人の賦」の紹介。

(8)、司馬相如は病気を理由に官職を辞し、茂陵に隠退した。司馬相如没後、天子が人を遣わし彼の著作物を求めた一件と彼の遺稿『封禅書』の紹介。

(9)、司馬遷の、司馬相如の賦に対する評価。

司馬相如と卓文君に関することは殆ど第(2)部分に書かれている。その他、数箇所で短く触れられているに過ぎない。「司馬相如傳」においては、司馬相如と卓文君に関する部分は文章全体の五パーセントしか占めてない。これに基づいて、史実としての卓文君と司馬相如の物語は次のような構造になっている。

(1)、梁孝王没後、司馬相如は帰省した臨邛で県知事の王吉に身を寄せた。

(2)、卓王孫に招待された。

(3)、最初は仮病で行きたがらなかったが、その後王吉が自ら迎えに行き、やむなく卓王孫の家に行った。

(4)、司馬相如は宴会中、琴を弾いて、卓文君に自分の想いを伝えた。

(5)、卓文君が司馬相如を窺がう経緯の一部始終。

(6)、司馬相如は卓文君の使用人を大金で買収した。

(7)、臨邛に戻り、車を売って、酒屋を開き、卓文君は酒を売り、司馬相如は皿を洗った。

(8)、卓王孫から援助を得、司馬相如の故郷の成都へ戻った。

(9)、司馬相如の出世。

(10)、司馬相如は官職を辞し、茂陵に隠遁した。

文献の記述から司馬相如と卓文君の人物像は凡そ次のようにまとめることができる。

まず司馬相如に関しては、文才に長け、傲岸、孤高であったのが彼の特徴として挙げられる。彼の傲岸さ、孤高さは次の四つの場面でよく現われている。

(1)、梁孝王が亡くなった後、彼が故郷へ帰り、臨邛の県知事の王吉に世話になったときのことである。その時、彼の家は貧しくて、王吉の世話になっているにも関わらず、王吉が訪ねたとき、彼は一度だけ会い、その後病と称して、王吉と会わなかった。

(2)、大富豪である卓王孫からの招待も断っている。彼にとっては、官僚や金持ちなどは自分と関係なく、ただ自分の好きなように行動したかったのである。

(3)、卓文君と駆け落ちした後、自分の車まで売って、酒屋を開いて、自分は店の使用人のように皿洗いをした。かつて天子に仕えた事があり、文才溢れる司馬相如は、自尊心もきっと高いはずである。卓文君のことを大変愛しているからこそ世俗の考えなど無視できるのである。

(4)、彼が求めているのは官職よりも、文才を如何なく発揮できる環境であり、自分の賦が世に認められることである。彼は最初家からの莫大な資金的援助によって長安宮廷の「郎」となり、ついで「武騎常侍」に昇進して、幸いにも景帝の側近として供奉するに至った[4]。しかし、彼はこの仕事を好きにはなれなかった。結局、彼はこの職を辞し、都を離れて、賦が好きな梁孝王（景帝の弟）の屋敷（開封）に身を寄せた。「武騎常侍」という職責は危険と隣り合わせであるにも関わらず、全く将来性のない消滅寸前の官職であり、割に合わない仕事であったことに彼が辞めた理由があるかもしれないが[5]、景帝が賦を好まなかったのが最も大きい原因であろう。彼が官職に対して興味が無いことは、卓文君と結婚した後、再び天子に「郎」という官職に封せられた折、『史記』の中の“称病閑居、不慕官爵”という言葉からも覗える。

以上をまとめると、司馬相如の人物像は、傲岸・孤高で、官職に興味がなく、世俗や礼教を無視して、自分の理想を追求し、愛する女性のために一生懸命に尽くす男と言えるだろう。

一方、史書で記録されている卓文君は自分が信じた愛情のために礼教や世俗を無視する傾向がある。この点では前述した司馬相如と合い通じるところがある。彼女は才色兼備な大富豪の娘であり、司馬相如との出逢いは17才の時であった。その時彼女は未亡人であったが、漢の時代は未亡人の再婚に対して寛容だったので、彼女にとって、家柄、身分などがつり合っている男性と再婚するのはそう難しくはなかったはずだろう。しかし史実では、彼女は当時貧乏である以外には何も無い35才の司馬相如に一目惚れし、駆け落ちしている。彼女は司馬相如が出世することに何の興味も示さず、司馬相如の奏でる琴の音を聞いて、自分の“知音”（良き理解者）だと悟り、そして、自分の一生涯を彼に託そうと決意した。彼女が司馬相如の出世について考えもしなかったことは文献の記述からも容易に推察する事ができる。将来二人でどうやって生活していくかも考えず、感情に任せて司馬相如と駆け落ちする事からも、（少なくとも司馬相如と出逢った以降については）彼女が“媒酌の言、父母の命”という当時の慣わしに縛られた女性ではない事がわかる。

Ⅱ、宋代以前の文言小説における卓文君と司馬相如の物語

宋代までの卓文君と司馬相如の逸話に関する文言小説は主に以下のものである。晋の時代の葛洪によって編集された筆記小説『西京雑記』[6]、唐代の伝奇小説『異聞集』に記録された「司馬相如挑琴」（その後宋の曾慥が編集した『類説』巻28にも「司馬相如挑琴」を収録した）。羅燁の『醉翁談録・小説開辟』の伝奇類には「卓文君」という題目が見られ、皇都風月主人により編纂された『緑窓新話』では「卓文君窺長卿撫琴」という話がある。しかし、これらの話はどれも文言であり、『史記』に比べて記述が短くなっているが、粗

筋は『史記』とほぼ同じである。『史記』と異なる点は、『西京雑記』には司馬相如は立身出世を目指して長安へ行き、城門に志を現わす詩を書いた節や司馬相如が卓文君と成都に駆け落ちし、鸕鷀裘を元手に酒を買ったという節を入れたことである。他の小説では鳳求凰という歌が挿入されている点である。例えば、『緑窓新話』での「卓文君窺長卿撫琴」において、卓文君と司馬相如のエピソードは次のように述べられている。

“司马长卿司馬相如闻临邛富人卓王孙有女卓文君新寡，好音。长卿素与临邛令王吉相善。时卓王孙门下僮客八百人，乃相谓曰：“令有贵客，为具召之。”并召令。请长卿。酒酣，临邛令前奏琴曰：“窃闻长卿好之，愿以自娱。”故司馬相如缪与令相重，而鼓琴以挑卓文君。歌曰：凤兮凤兮归故乡，遨游四海兮求其皇。时未遇兮无所将，何悟今夕兮登斯堂，有艳淑女在此方。室迩人遐独我伤，何缘交颈。长卿时从车骑，雍容闲雅甚都。卓文君窃从户窺,心悦而好之。司馬相如乃令侍人重赐卓文君侍者,通殷勤。卓文君奔长卿。遂相与驰归成都。”

Ⅲ、白話小説における卓文君と司馬相如の物語および人物像の変容

文学作品における卓文君と司馬相如についての物語および人物像に変化が見られ始めたのは、最古の白話小説集と呼ばれる『清平山堂話本』に記録された「風月瑞仙亭」からである。『清平山堂話本』は、嘉靖(1522－1566)二十年から三十年までの間に出版されたと言われているが、成立年代ははっきり分かっていない[7]。また、「風月瑞仙亭」の後半の一部が紛失し、完全な形では残っていない。「風月瑞仙亭」の成立年代については、一般的には宋代と考えられているので、小論においても宋代の著作であるという立場を取る。

そこで、物語や人物像の変容に寄与しうる記述にとりわけ注目して、史実と白話小説を比較・対照した結果を次表にまとめた。項目は物語の展開順に並べてある。また、些細な表現の差異には拘らなかった。

表１　史実と白話小説の比較一覧

項目	場　面	『史記』	「風月瑞仙亭」　(『清平山堂話本』)
1	卓邸に行く契機	県知事の知己として卓王孫に招かれた。	壮麗豪華な卓王孫邸の庭園を司馬相如に見せてあげるように県知事が卓王孫に頼んだ。
2	招待されたときの司馬相如の態度	仮病を使って行きたがらなかった。	喜んで瑞仙亭に泊まった。
3	卓王孫の子供	三人（男一人、女二人）	娘一人（卓文君）。
4	卓文君の身分	17歳の未亡人。	年頃であるが、まだ婚約していない。
5	卓文君についての描写	綺麗で、音楽を好む女性である。	才色兼備で、詩詞歌賦の文才に長け、針仕事、酒づくりなどは全部できる。
6	司馬相如が琴を弾く場所と契機	初めて卓邸へ行ったときの宴会で、県知事に頼まれた。	瑞仙亭に半月泊まって折、卓文君が音楽好きだと知り、卓文君を誘惑しようという下心が芽生えた。ある日、琴童に観てもらって、聞こえた足音の主が卓文君のものだと分かると、彼は琴を弾いたのである。

7	卓文君が司馬相如に恋した経緯	司馬相如が奏でる琴を聞き、窓から窺って、好きになった。	閨房で座って時間をつぶしていたとき、召使の春児から司馬相如が美男で、琴が上手であると聞き、彼に興味を持つようになった。その後、窓から窺って、将来きっと出世するだろうと判断し、司馬相如のことをつかもうと考えた。
8	二人が駆け落ちする前の準備	司馬相如は大金で卓文君の召使いを買収した。	卓文君は貨幣や金銀の装身具を用意した。
9	駆け落ちする夜	その夜、卓文君は司馬相如の所へ行き、二人は駆け落ちした。	司馬相如の奏でる琴を聞いた卓文君は、彼に挨拶しに行った。二人でお酒を交わした後、司馬相如に誘われ、二人は花園で情を通じた。その後、卓文君の提案で駆け落ちした。
10	駆け落ちした直後の卓王孫の態度	怒って、お金を一切卓文君に与えなかった。	父母の命を聞かずに駆け落ちしたことに恥ずかしいと思った。
11	酒屋を開く提案	司馬相如の提案により、成都から臨邛へ戻って彼の車を元手に酒屋を開いた。	司馬相如の提案で、成都で酒屋を開いた。
12	酒屋を開いた後、皿を洗う人物	司馬相如	卓文君（此時已遂題橋志、莫負当壚涤器人。）
13	卓文君の当壚の理由	司馬相如に言われたからである。	生活を維持するため、自分がやると言ったのである。
14	卓王孫の態度の変化の契機とその後の行為	親戚に諭されて卓文君にお金をあげた。	司馬相如が出世してからである。
15	出世後の司馬相如の気持ちの変化	記述なし。	自分の望みが実現した。（已遂平生之願）
16	司馬相如が出世した後の卓文君の態度	記述なし。	司馬相如に自分に対する気持ちが変わらないように言う。
17	司馬相如が出世した後の卓王孫の態度	男兄弟と同じように卓文君に財産を与えた。	卓文君の召使いの春児をつれて、成都へ娘を訪ねに行き、卓文君の家に泊まって司馬相如を待った。

Ⅳ、白話小説における物語および人物像変化の特徴

前表から分かるように、白話小説は史書と比べてみると、かなりの部分に変化が認められる。主な変化のパターンとしては、(1)人物像、(2)物語の展開、そして(3)物語が発生する舞台設定、に分ける事ができる。

そこで、以下ではそれぞれの点について議論を進めたい。

1．人物像の設定

1．1　司馬相如の傲岸さが無くなった点。

史実では司馬相如はもともと傲岸で孤高な人物として描かれているが、白話小説では彼の傲岸さが影を潜めている。史書では県知事が司馬相如を訪ねることになっているが、小説では司馬相如の方から県知事の所へ赴くという設定になっている。特に、卓王孫に泊まるよう勧められたとき、司馬相如は卓王孫の厚意に感謝して卓邸に泊まった（項目２）。次に、琴を弾いて、卓文君の心を動かす話について、史書では、彼が卓邸での宴会で得意の琴を弾き、「鳳求凰」を歌った。歌の内容はちょっと露骨であるが、彼自身は正々堂々としていた。その正々堂々さこそ彼の自由奔放、凡俗を超越する姿勢といえるだろう。しかし、白話小説では、彼のそのような面が失せ、司馬相如のイメージは小さくなってしまっている（項目６）。唯我独尊で自由奔放な司馬相如の人物像が矮小化されてしまった印象が否めない。

1．2　卓文君の愛情至上主義から現実生活主義に変わった点。

史書では、愛する相手さえ傍らにいれば他に何も要らないと思えるほど、二人は互いに純愛を求めている（愛情至上主義）。特に駆け落ち後の様子を述べるくだりではその心情が滲み出ている（項目12）。裕福な生活をおくっていた卓分君も駆け落ち後の生活設計を考えてはおらず、二人の間の愛情に対して、お金などの現実的な事柄が入る余地などなかった。一方、白話小説では、卓文君が生活設計に思慮を巡らせている記述が見られ（項目８）、この点で対照的である。

1．3　主人公の情欲を強調している点。

史書や文言小説では司馬相如が卓文君に迫るというくだりは全くみられない。しかしながら、白話小説では司馬相如が“欲就枕席之歓”と卓文君に対してかなり露骨な迫り方をしており（項目９）、司馬相如の軽薄そうな一面が垣間見られる。対する卓文君も彼の誘惑を拒絶しない。小説で情を通じる場面はこのくだりだけであるが、前節の観点も併せて考えると、情欲を強調している印象がある。

2．物語の展開の変化

史書における卓文君と司馬相如の物語のキーポイントは琴を弾くことである。琴や奏でられる詩は、音楽を好きな卓文君の気持ちを動かすのに重要な役割を担っており、琴が無いという設定であったならば、二人の物語はきっと起こることはなかっただろう（項目６）。二人にまつわる文学作品の多くは、琴や詩を採り上げることで、作品そのものに音楽性、芸術性を与え、格調高い文体になっている。しかし、白話小説では琴の重要性がなくなり、立身出世に物語のキーポイントが移っている。

史書においては、司馬相如と卓文君は官職に対して少しも興味が持っていないように述べられているが、司馬相如が官職を二回辞めたことからもそのことが窺える。また、司馬相如の出世によって、娘と駆け落ちした彼に対する卓王孫の態度が変化したわけではない。例えば、卓王孫が娘の卓文君に経済的援助を与えた理由は、項目14からもわかるように、司馬相如が出世したためではなく、まわりの親戚に“有一男两女，所不足者非財也。今卓

文君已失身于司马长卿，长卿故倦游，虽贫，其人材足依也。且又令客，独奈何相辱如此”と諭され、“卓王孙不得已，分与卓文君僮百人，钱百万，及其嫁时衣被财物”という状況に至ったからである。しかし、白話小説においては、卓王孫の態度はすべて司馬相如の出世に左右されている。司馬相如が官僚になる前は、娘夫婦のことをただ恥ずかしく思うだけで、経済的な援助を一切しなかったが（項目10）、司馬相如の出世を耳にすると、彼はすぐ娘の家を訪ねに行った（項目17）。司馬相如自身の心情描写に関しても、小説では“虽然游艺江湖，其实志在功名。”とあり、駆け落ち後の貧困生活にあえぐ中でも、司馬相如は“他料想司馬長卿必有発達時分”と自身に言い聞かせている。遂には、司馬相如が天子に「郎」に封ぜられたとき、彼は“正是衣錦還郷、已遂平生之願”という感慨を抱いた様子が語られ（項目15）、史実における司馬相如の人物像とは対照的な心情変化を見せている。

立身出世の願望に関しては卓文君の行動からも明確に読み取ることができる。史書では司馬相如の奏でる琴の音に誘われて彼女が恋に落ちた。展開の仕方は、琴の音を聞く――窓から窺う――駆け落ちする、という順である。小説での順番は、（司馬相如が美男だと聞いて）窓から窺う――駆け落ちの準備する――琴の音を聞く――駆け落ちする、である。史書では、卓文君を強く魅きつけるのは司馬相如の奏でる琴の音（恐らくは大変美しい音の調べであろう）であり、琴の音は二人の物語には不可欠な要素である。しかしながら、白話小説では、その琴の音は重要な要素ではなくなった。小説において卓文君が司馬相如を見初めたのは、窓から窺がった彼に出世の予感（将来性）を感じたからであり、彼の奏でる琴の音が駆け落ちを直接決意させたのではない（項目７）。見初めた後の物語の焦点は司馬相如の卓文君への想いに絞られている。司馬相如は卓文君に対する想いを琴の音に託して彼女に伝えたが、琴の音はあくまで小道具に過ぎなくなっている。考えてみると、想いを伝える方法は琴の演奏に限ったわけではない。そういう意味で、小説では琴の音が想いを伝えるための単なる演出効果として利用されたぐらいに考えられる。その代わり小説で中心となったのは、卓文君が司馬相如を見初めた理由でもある立身出世であった。このことは卓王孫の“我女児有先見之明、為見此人才貌双全、必然顕達、所以成了親事。”という言葉からも明確である。まとめると、小説では出世ということが物語のキーポイントになっており、司馬相如の出世をめぐって物語が展開している。

３．物語が発生する舞台の設定

史書によると、司馬相如と卓文君が初めて出会うのは卓文君の屋敷の座敷であった。しかし、白話小説になると、舞台は座敷から庭園に変化した。司馬相如が卓文君の家に行く理由も“卓王孫に招かれたため”から“卓邸の絢爛豪華な庭園を見に行くため”に変わっている（項目１）。小説の記述によると、卓王孫の家には“有亭台池館、華美可玩。”とあり、特に、そのなかの瑞仙亭は“四面芳菲爛漫、真可遊息。京洛名園、皆不能過此。所以遊宦公子、江湖士夫、無不相訪。”と描写されている。白話小説における物語の展開に基づけば、庭園がなければ、司馬相如は卓文君の家に行く機会がなく、二人のロマンスは当然始まらない。この庭園は卓文君と司馬相如が密会する場所としても利用され（項目９）、

二人の物語の背景に豪華な彩りを与えている。

V、物語および人物像の変化と時代背景の関わり

前述したように、卓文君と司馬相如の物語についての変化は、文言小説では見られず、白話小説の「風月瑞仙亭」から始まったものである。前節で議論した1．人物像の設定の変化、2．物語の展開の変化、ならびに3．物語発生する舞台の設定の変化に関して、その理由をただ一つの要因に見出すことは難しく、一概に論じることができない。

1．一般的特徴：俗文化への変容としての人物像の変化

周知のように、白話小説の前身は話本である。話本は講釈師が町で物語を語り聞かせる（“説話”）ときに使っていた底本である。聴衆は主に市民階層と農民であった。ここで言う市民階層とは、主に手工業者、店員、規模の小さい商人、兵士などを指している[8]。都市の繁栄、商業、物流の発達により市民階層が台頭してきた。彼らの文化水準は文化人たちより低いが、生活環境、人生経験や見聞は上流知識人や農民たちとは異なり、彼ら独特の特徴を持っている。彼らの民衆意識として、自分たちの嗜好に合ったものを望んでおり、この背景のもと、市民たちを聴衆として取り込んで多様な“説話”が盛んになっていったものと考えられる[9]。小説を語る講釈師には廓介酒李一郎、棗児徐二郎、粥張三、故衣毛三、臆肝朱、色頭陳彬といった名前が残っており、名前から彼らは商人だと推測できる。市民階層の一部であった彼ら講釈師が同じく市民階層である聴衆の嗜好を反映させて登場人物像の変更を加えたという点は、著者が改めて指摘するまでもなく自明なことであろう。

「風月瑞仙亭」における人物像の設定の変化もやはり市民階層の嗜好の反映である。その変化は人物像の“俗化”と読めばよいだろう。“俗”こそ市民文化の特徴である。市民階層は上流知識人ほど自尊心に拘ってはおらず、重要であることは、金を稼いで、裕福な生活を送ることでる。それゆえ、「風月瑞仙亭」で登場する司馬相如は富豪の招待に喜んで応じ、その邸宅に泊ったという設定に変更されたのであろう。官僚や富豪に対する司馬相如の傲岸な態度が市民階層の生活意識から遠いものであったからこそ、「風月瑞仙亭」において彼の傲岸な部分が無くなったのだと考えられる。

卓文君は大富豪の娘であるため、身の回りの生活に全然困ったことがないので、生活の苦労を勿論わからなかったであろう。史書の中で、彼女は司馬相如と駆け落ちするとき、恐らくお金を用意しようと考えもしなかったはずである。しかし、市民階層はもっと現実的な愛情（結婚生活）を考えている。白話小説の中では卓文君が司馬相如と生活を共にする前に、まず将来必要となるお金（生活資金）を準備したのである。

白話小説における卓文君と司馬相如が情を通じる設定も市民階層の趣向に合わせたものとして考えることができる。宋代の白話小説では公案と恋愛についての話が最も多く[10]、「宿香亭張浩遇鶯鶯」、「間雲庵阮三償冤債」、「鬧樊楼多情周勝仙」などの恋愛を題材にした白話小説ではどれも情欲を誇張した性描写が見られる。これは当時の白話小説の特徴となっている[11]。これらの小説は性描写が無くても違和感無く物語が成立する。それにも関

わらず性描写を挿入したのは当時の市民階層の嗜好を満たすためと言えるだろう。つまり、性描写が物語の構造的役割としてではなく、演出効果として用いられていたと考えられる。故に、この時代の小説において卓文君と司馬相如が情を通じる場面が設定されたのは、市民階層の嗜好を満たすように味付けするための演出効果であろうと筆者は考える。

2．特異性：雅文化の受容層としての俗文化～物語の展開の変化と物語発生する舞台の設定の変化～

白話小説で見られる特徴の中で、最も顕著なものは立身出世を巡る物語展開になったことと物語の舞台（契機）としての華麗な庭園の設定である。この二つの特徴は先に述べた“俗化”で説明するのは暴論かもしれない。なぜならば、説明するまでもなく、“俗化”は市民階層の生活意識への回帰であるが、立身出世や華麗な庭園は一般市民の生活からかけ離れた上流知識人の“雅”文化の象徴である。それゆえ、小論ではこの二点を個別に考える。

まず立身出世について見てみよう。そもそも立身出世は知識人たちの憧れであり、知識人以外の市民階層にとっては縁の無い事であった。それゆえ、白話小説におけるこの設定の根底には宋代の特有の歴史的要因が潜んでいると考えられる。宋代では文化が重んじられ、その担い手である文人を登用する事で国を管理した。宋太祖が建国した頃、学問や知識人を重視していた。彼は“宰相須用読書人”[12]、“以儒臣知州事”[13]と主張し、その理念は後世の皇帝に先祖代々の家法として扱われた。宋王朝は“与士大夫治天下”という建国理念で、文官政治を実施し、文官採用を目的として科挙制度を整備・拡充を図った。唐の時代でも既に科挙がかなり盛んであったが、政府が官僚を採用する際、科挙以外に戦功や家柄も重視された。しかし、宋代では科挙がほぼ唯一の官僚へのルートになっており、戦功や家柄は殆ど考慮されなくなっていた。鄭樵の『通志』巻25には、“取士不問家世”と書かれている。馬端臨の『文献通考』の統計によると、唐代においては289年間科挙で採用された官僚は全部で8500人、年平均30人未満である。宋代は太祖建隆元年（960）年から理宗嘉熙二年(1238)279年間採用した人数は49300人余、年平均176人である。このように科挙により、朝廷の官僚がすべて知識人で埋め尽くされるという具合になってしまった 。張端義は『貴耳集』で[14]“満潮朱紫貴、尽是読書人”と述べている。当時、社会全体が文人崇拝という雰囲気に覆い尽くされてしまったと言って良い。

このような社会状況は人々を立身出世に駆り立たせた。蘇轍の『上皇帝書』では“今世取人、誦文書、習課程、未有不可為吏者也。其求之不難、而得之甚楽、是以群起而趨之、凡今農工商賈之家、未有不舎其旧而為士者[15]。”と述べ、また『文献通考』（選挙三）の記録によると、太宗淳化三年に都での受験者は全部で17000人余であった。このときの合格者はたったの1127人（合格率は15分の１）であり、この数字から当時の科挙が熾烈な競争であり、人々がいかに立身出世に目を奪われていたかがわかる。科挙による文人登用が市民階層に立身出世実現への現実感を強く抱かせたのである。講釈師たちは彼らの憧れ、あるいは夢を小説の主人公の行動を通して体現したかったのである。

白話小説においては、庭園の設定も宋代の社会背景と強い影響を受けている。前述した

ように、史書における物語は庭園と一切関係ないが、白話小説では、庭園が小説の展開に不可欠な要素になっていた。司馬相如が卓文君の家に行く目的は絢爛豪華な庭園を見るためである。この小説が描きたいのは卓文君と司馬相如のロマンスであるので、司馬相如と卓文君のなり染めが史実どおりであっても勿論構わない。しかしながら、白話小説において庭園での出逢いが設定され、卓文君の美貌に関する描写に負けないぐらい庭園の様子が仔細に描かれているのには相応の理由があると思う。これだけ庭園を強調するのは何故であろうか。この点を明確にするには庭園文化の歴史について考察を加えなければならない。

中国の庭園は主に皇族庭園、寺観庭園、個人庭園と三種類に分かれている。中国造園の歴史は商の時代に遡ることが出来る。しかし、漢代以前において造園することが出来るのは皇帝や貴族たちぐらいであり、個人が庭園を造ることは出来なかった[16]。漢の時代に入ると個人庭園が出現した。『西京雑記』巻3では、茂陵の富豪袁広漢が作った庭園の様子が記録されている。しかしながら、当時は個人庭園がまだ普及していなかった。唐以前の庭園文化もやはり皇族庭園に該当していた。唐の半ば以後、個人庭園が増え、数においても皇族庭園を上回るようになった。そして、秦から始まった庭園文化が成熟期に入ったのは宋の頃である[17]。北宋の都の庭園について、文献に名前が残された皇族庭園、個人庭園の数は百五十以上にのぼる。南宋の都の庭園もかなり多い。『夢粱録』には“西冷橋即里湖内、俱是貴官園圃、涼堂画閣、高台危榭、花木奇秀、燦然可観。”と書かれている。『武林旧事・湖山勝概』の記録によると、個人庭園の数は四十以上になっている。こういった史料から宋代の庭園文化が繁栄している様子を想像することができる。李格非の『洛陽名園記』の記録によれば、宋の個人庭園は公衆に開放されていて、市民階層の者達が自由に庭園に入ることができた。池を掘り、草木や花、特に竹を植えることも当時の庭園に見られる特徴である。南宋に至ると、石山を造る個人庭園が流行になった。このような庭園文化は文学作品にも反映されており、「風月瑞仙亭」には、卓王孫邸の庭園に対して、“遊宦公子、江湖士夫、無不相訪。”と書かれている。小説における卓文君の家の庭園についての描写、たとえば“山疊岷岷怪石、栽西洛名花。”“池沼内、魚躍錦鱗；花木上、禽飛翡翠。”という記述は当時の庭園文化の特徴と対応している。宋代の白話小説「宿香亭張浩遇鶯鶯」にも似たような庭園描写を見出せる。

宋代に入り、庭園文化は円熟期になったが、市民階層にとっては庭園を造るのは無理なことである。庭園を所有しているのは、やはり官僚や富豪などの社会の上層階級である。庭園文化はあくまでも市民階層の象徴たる“俗”文化とは言えず、上層階級の“雅”の文化である。しかし、宋代では円熟期を迎えた庭園文化は、公衆に開放されることで市民階層に大きな影響を与える身近な存在になっていった。そして、市民階層はその“雅”文化を受容して、自分の“俗”文化に取り入れたのである。したがって、白話小説における立身出世と庭園の設定は、俗文化に取り込まれた雅の文化の影響の現れであると筆者は考える。

Ⅵ、結び

卓文君と司馬相如の物語はもともと史書に収められた物語であるが、宋代の白話小説と比較すると、物語の設定・展開や人物像において変容が認められる。白話小説においては、史書の中で垣間見られた司馬相如の傲岸な姿も消え、雅びさも影が薄くなっている。一方、卓文君は愛情や結婚生活に対して現実的な視点を持った女性として描かれている。このような人物像の“俗化”は宋代の経済発展によって市民階層が拡大したことに答えを求める事ができる。市民文学の産物である白話小説が市民階層の嗜好に合わせるために“俗”化するのは論を待たず明白な一般的特徴と言えよう。また、宋代の白話小説の中で表れてきた“雅”文化は上層階級の憧れ、嗜好であり、市民階層のそれではない。立身出世や庭園の強調などはその最たる例である。この現象は俗文学の一種としての白話小説が雅文化の受容層として作用したとみなすことできる。この点は「風月瑞仙亭」の持つ特異性と考えることが出来るだろう。一般的には、白話小説は市民文化の産物だと言われているが、宋代においては政府が知識人を大変重視したため、科挙が大変盛んになり、加えて庭園文化も円熟期を迎えていたため、知識人特有の立身出世という夢や上層階級の趣味としての庭園文化が市民階層に浸透していった。すなわち、「風月瑞仙亭」は、知識人や上層階級の嗜好を上手に取り込みながら一般市民の嗜好を反映させた結果作り上げられた白話小説である。

文学作品は時代背景、社会状況から少なからず影響を受けており、その結果、文学作品はその時代を映す鏡になり、当時の様子を浮き彫りにするのである。宋代に生まれた「風月瑞仙亭」における物語のキーポイントとして設定された立身出世や庭園文化という要素は、後世の古典愛情物語に大きな影響を与えた。例えば、愛情に関する元代の有名な劇の展開は殆ど庭園と立身出世を含んでいる。この点ついては研究を進めていく予定である。

[1] 「風月瑞仙亭」の成立年代については、一般的には宋のものと思われている。小論においても、宋代の著作であるという立場を取る。

[2] 胡士莹　『話本小説概論』（中華書局　1980年５月）第40頁。ここで言う市民とは、主に手工業者、店員、規模の小さい商人、兵士などを指している。

[3] 詹満江　「李義山詩に詠われた司馬相如――隠喩としての自画像」（日本中国学会報　第四十五集）第65頁。

[4] 岡村繁　「司馬相如伝考」（『學林』　第二十八、二十九号）第七十四頁。

[5] 同注４。

[6] 『漢魏叢書』による。

[7] 陳大康　『明代小説史』（上海文芸出版社　2000年10月）第718頁。

[8] 胡士莹　『話本小説概論』（中華書局　1980年５月）第40頁。

[9] 南宋の書物『西湖老人繁勝録』、『夢粱録』、『武林旧事』などでは、“説話”の種類を小説、説鉄騎児、説史書、説経などに分類し、小説はさらに煙粉、伝奇、公案、霊怪などに細分化されている。小論で議論している「風月瑞仙亭」は伝奇小説類に属している。

[10] 胡士莹　『話本小説概論』（中華書局　1980年５月）第309頁。

[11] 何満子　『中国愛情小説中的両性関係』（上海書店出版社　1999年３月）第91頁。

[12] 『続資治通鑒長編』巻７乾徳四年五月。

[13]『続資治通鑒長編』巻13開宝五年十二月。
[14] 張海鴎　『宋代文化与文学研究』（中国社会科学出版社　2002年４月）第37頁。
[15]『欒城集』巻21。
[16] 孟亜男　『中国園林史』（文津出版社　民国八十二年七月）第一五頁。
[17] 周維権　『中国古典園林史』（清華大学出版社　1990年12月）第91頁。

参考・引用文献

図書
1 洪　榾　『清平山堂話本』、文学古籍刊行社、1987年７月。
2 司馬遷　『史記』、中華書局、1959年。
3 何満子　『中国愛情小説中的両性関係』、上海書店出版社、1999年３月。
4 張海鴎　『宋代文化与文学研究』、中国社会科学出版社、2002年４月。
5 孟亜男　『中国園林史』、文津出版社、民国八十二年七月。
6 周維権　『中国古典園林史』、清華大学出版社、1990年12月。
7 胡士莹　『話本小説概論』、中華書局　、1980年５月。
8 陳大康　『明代小説史』、上海文芸出版社、　2000年10月。

雑誌論文
1 詹満江　「李義山詩に詠われた司馬相如———隠喩としての自画像」、『日本中国学会報』　第45集、1994年。
2 岡村繁　「司馬相如伝考」、『學林』第28、29号、1996年、1997年。